ウミガメを守り続ける

話し手 指宿市役所 環境政策課 ウミガメ担当
日髙 末盛（ひだか すえもり）さん（昭和24年9月24日生）
聞き手 鹿児島県立 指宿高等学校 普通科 1年

ウミガメとの出会い

僕は、頴娃高校の建築科を卒業し、関西で働いていました。

定年退職後は指宿市役所の、ウミガメの保護などをしている部署に配属になって今年で8年目です。ウミガメは世界で8種類確認されていて、指宿には昔からアカウミガメが上陸していました。

昭和63年に「鹿児島県ウミガメ保護条例」が制定されたのをきっかけに、指宿市役所でもウミガメの保護と生態研究が活発になったんです。

産卵中のアカウミガメ

ウミガメの産卵サイクルと保護活動

ウミガメは、砂浜への上陸・産卵回数が多い年と少ない年で分かれています。指宿はだいたい4年に一度ごとに多くなりますね。

多い時には70頭くらい上陸します。だから、5月から7月の産卵時期は、僕も毎日忙しいです。朝6時から砂浜を見回り、目撃情報が入ったら、卵を外敵から保護するために砂浜に駆けつけます。

駆けつけても、卵は地中60㎝くらいに埋まっているから、どこに卵を産んだか見た目ではわかりません。だから、カメの足跡と棒を地面に慎重に挿して探すんですが、これが難しい。卵が埋まっている場所は、地中が空洞になっているので、慎重に棒を地面に挿すとスポッという感覚があるんです。この感覚を頼りに産卵場所を特定します。この感覚がわかるようになるのに苦労しました。卵を見つけたら慎重に掘り起こして1つ1つ丁寧に数えて集め、ふ化場に持って行き、埋め戻します。一回の産卵で120個くらい産みますね。

子ガメのふ化を見守って

ふ化場では、みんな元気に生まれるんですが、子ガメによっては、海にたどり着けず、動き回って疲れてヘトヘトになっています。そういう時は、いっそのこと手に乗せて海に放してやりたい気持ちになるんですが、グッと堪えるんです。これから広い海を旅しに行くことを考えると、見守ることが一番良い判断かなって思います。ふ化を見守っている時は、卵を保護してからずっと見守ってきたので愛着が湧いて、感動でいっぱい。もうわが子のようにかわいくて仕方がない。

懸命に海へ帰る子ガメ

僕は大の動物好きではないけど、子ガメがふ化して海へ帰る一生懸命な姿を見て、ウミガメ保護という仕事に夢中になりました。

産卵時期に入ると、この仕事に対して素直になれるというか、カメに対して服従しますよね。体力が続く限り、続けたいですね。

ウミガメが来る海岸であり続けるために

僕は、ウミガメ保護という仕事上、頻繁に海岸に行きます。

その際砂浜には漁具や生活日用品のプラスチック、ペットボトルとか、いろんなゴミがたくさんあって…拾っても拾ってもなかなか減ってくれません。これがほんとに問題です。僕たち人間も、海が汚いと嫌になるでしょ？でも、ウミガメや他の生物にも迷惑になってるんです。例えば、産卵のために浜に来た母ウミガメや、卵からふ化して海に向かうウミガメの赤ちゃんの行く手を、ゴミが妨げになっているんです。

また、捨てられたプラスチックゴミが長く漂流すると、ウミガメの餌である藻がついてしまいます。それをプラスチックごとウミガメや他の生物が食べて、身体に害が出てしまう時があります。もう大変なこと…。

だから、みんなにお願いというか、僕から伝えたいことは、“海にゴミを捨てないで”それだけです。

聞き書きコラム

地球温暖化により消えるウミガメ

ウミガメの性別は、砂の温度で決まる。約29度で同じ割合になり、それより高ければメス、低ければオスになる割合が高くなる。地球温暖化が進み、砂の温度が高くなってくると、ほとんどがメスになってしまう恐れがあるため、絶滅が危惧されている。

ウミガメを守るために、私たち一人ひとりが地球温暖化防止に取り組む必要がある。